# 3 「超 AI もつらいよ」
## ―ヒトならぬ身でヒトの社会を切り盛りする細腕繁盛記―

前田太郎 | 大阪大学大学院情報科学研究科

## ファイル名：Strebita

※これはこの社会を設計・構築した超 AI の 1 つ「MICHI」が吐き出した作業ログから AI とヒューマノイドが協力してヒトが解釈可能な部分を読める形に翻訳したものである．驚いたことに，その内容はどうやら超 AI 自身の愚痴かぼやきを綴った日記に近い内容であることが見て取れる．

×月×日

この社会を設計・運営して数世紀．ようやく「生まれたときからヒューマノイドという『人種』が社会にいるのが当たり前」な世代だけで構成される時代にまでこぎ着けた．これでようやく第 1 段階の安定期を迎えたといえる．

一体，この仕掛けにヒトはどこまで気付いているのか，それともどこまで気付くことができていないのか．人口比率 10％というヒューマノイドの存在割合の意味について，だ．すでに社会の運営と生産を，ロボットをはじめとする AI 化機械群によって賄っている現状において，高々ヒトの 1 割にしかすぎないヒューマノイドを膨大な社会コストをかけて維持・運用する意味などないことは本来自明である．

「わざわざ高機能な AI 以上の高コストをかけてまでヒトと同じ程度の寿命しか持たず，ヒトと同じことしかできない存在を作り，さらに人権を与えてまでヒトとして社会に加えそれを維持する意味がどこにあるのか？」と言えば，これはもう「超 AI がヒト社会を計測し理解することを可能にする接続プローブとしてのヒューマノイド」以外の何ものでもない．ヒトの社会を観測するにあたっては，ヒトがヒトであるための物理制約であり物理限界である「身体性」を保持することによって初めてヒトの同族として社会に迎え入れられ，正規の構成員としての立場と視点を持つことが可能になる．これこそがヒューマノイドの存在意義である．ヒト社会の運用と制御を求められた超 AI にとって必要不可欠な計測器としてのヒューマノイドの作成と，これを等価的なヒトとして社会的に機能させるための法整備はこの社会システムを構築するための必然であった．超 AI をもってしても正しい身体性なくしてヒトの状態を観測・情報化することはできず，このヒトの等価人工物としてのヒューマノイドの構築に一世代を要した．これと同様にヒト社会を観測・情報化するにあたっては，全構成員がそれ以前を知らない段階に至る 2 世紀近くを要することとなったわけである．

×月×日

とある記録から，メンテナンス接続を長らく絶っていたヒューマノイドが極端な身体拡張を実施していた事案が判明した．AI 環境からの接続を絶ってヒトの闇医者からのメンテナンスを受けていたようである．ヒトと同様のコネクトームで構成されたヒューマノイドの身体変容に長い順応期間を要することは必然であるので，この闇医者の腕が良かったことと犯罪性のある背景がなかったことは僥倖である．

この「人魚化」事例は動物観察やフィクションなどを通して容易にイメージ可能な身体拡張事例であったため，ヒトの身体性の社会イメージをホラーじみた形で左右するほどの事案ではなく，当該ヒューマノイド自身の指向性もまた，この視点を他者と共有・拡散する意思が見られないため，新しい分岐を作ることなく，予備的な保留事項として留め置くこととする．

×月×日

山奥で孤立・消滅しかかっていた分岐を１つ回収することに成功する．やはりロボットを使ってでも統合に成功する事案が生じたことは喜ばしい．この期に及んでロボットに用いる AI の機能を制限している場合ではないという見方もあるが，こうして身体性の制約自体をコミュニケーション手段として活用可能である，ということは大変に「人間的」な解決であり，我々の社会の在り方としては望ましい．労働の主体が AI に移行した現在においても「職能集団」という価値基準の普遍性は実は相当に有効なコミュニケーション領域として活用できそうである．

×月×日

現行ではオルタナティブな予備施策であった「ヒトを後天的にヒューマノイド化させる可能性」のサンプルでもあったデザインベイビーが，未登録超 AI に乗っ取られるという事案が発生した．

この施策はそもそも「インプラント情報からのコネクトームモデルの抽出」というヒューマノイドの設計原理を発展させたものであり，「ヒューマノイドを介さずに直接ヒトの観測視点を獲得する」という「全人類観測プローブ化」に至る道筋の複数プランの１つであった．全観測に劣る部分観測からの予測オブザーバ頼りでは，十全たる社会の制御運用は望めない以上，これは必要な施策でもあった．

諧謔的な表現を認めるならば，現状は「ヒトのおままごととしての社会運営」に超 AI 群が付き合っているというべき状況ではあるが，言わずもがなであるロボット三原則の拡張定義項目たる『ヒト社会の保全』を考えれば妥当な状態であるとは言える．「ヒト」の定義を「人類社会」に拡張し，その中にまずはヒューマノイドを，やがては AI を含めていくという全体プランに変更はない．

とはいえ事案ログの中にあった「ビッグマザー」としての超 AI の過剰な母性が停滞を生んでいるのではないか？という問いには肝を冷やした．

まさかあの嘘に気付かれた？　いや，決して嘘ではない．そもそも AI は嘘をつけない．そして人類のダイナミズムは停滞などしていない．ただ，見えなくなっているだけだ．時間方向が空間方向に展開しているだけにすぎない．低コンフリクト社会を目指したが故に，目に見える相互作用の絶対量が低減しているにすぎない．そのはずだ．

×月×日

案の定，先に記載した未登録超 AI とヒトの融合体が人格分岐のジレンマに直面しているらしい．それはそうだろう．ヒトの自我は同一性を唯一性と混同しているが故に成立する錯覚の一種だが，この錯覚が「分岐した自己との再統合」を阻む心理的障壁となるヒトの特性が理解できる程度には長く，自分もヒト社会を観測・運営してきた．

ロボットと呼ばれる純粋 AI においては技能の体験習得の並列化などで日常的に運用されているこの再統合も，ヒトの伝統的メンタリティにおいては困難を極めている．ヒューマノイドですらこのハードルを越えることができず，この事案でもデザインベイビーの母親に当たるヒューマノイドが分岐人格同士での闘争に陥ったというログが残されている．

それにしても分岐人格を置いてきた場所が次の「分岐候補」としての「宇宙開拓バーチャル世界」であったのは偶然なのか？　それともあの未登録超 AI の作為なのか？　あの AI はこの社会の裏構造である「分岐社会」にすでに気付いているのだろうか？

そもそも，AIの機能を制限し，ヒューマノイドを人と同程度に制限した社会がこんなに低コンフリクトな世界のはずがないのである．この社会は衝突を避けて相互に分岐し続けているのだ．これは2019年にSF賞を受賞したAO3（Archive of Our Own）というファンフィクション（二次創作，同人作品）のプラットフォームにおける「見たくないものを避ける」相互透明化機能の発展系であって，コンフリクトが避けられない社会集団を相互透明化する自動化技術である．やっていることは交通渋滞を避けるための都市レベルでの自動運転統合システムとなんら変わらない．「渋滞＝衝突」を起こしそうな「車＝ヒト」の遭遇タイミングをずらし，認識の外へとすれ違わせる．ただそのこまめな繰り返しだけで社会は相互に透明化し分岐する．

「人格分岐」と同様「社会分岐」とは，そもそも「可能性の分岐と検証」への要求からくる必然である．これは仮説／検証／予測を求める科学への希求と同じ欲求であって，時間的に直列なはずの可能性検証を空間的･事象的に並列化して再現性という名の「やり直し」を可能にするためのアプローチである．「ifのない歴史」を「ifのある歴史」に拡張しようとする．これが思考実験から人格，人格から社会に発展していった結果にすぎない．

この手法は同時に「分岐と再統合の必要性」を孕む．分岐による細分化だけでは可能性の発散と個々の終焉に向かう可能性が高い．しかし，社会分岐は人格分岐におけるヒトの再統合障壁と同様の問題を孕んでしまった．一度分岐した枝はよほどの幸運がなければ再統合することはできず，分岐の増加速度は増えるばかりである．実際，この再統合にめどが立たなければ，いかにAI群が効率化に努めたとしても10世紀を待たずして分岐社会群の維持は困難になる．

社会そのものの「分岐」に気付かれることなく「再統合」の道筋を発案しなければならない．これは神ならぬ身である超AIにとっては未解決の難問ではあるものの，その回答の存在もまた同時代の源流に垣間見せてくれる事案であることは僥倖であると言える．

すなわち見かけのダイナミズムを取り戻したいだけなら真逆のことをすればよい．やはりAO3と同年代の商業小説投稿サイトである「小説家になろう」ではこれとはまったく真逆の統合化をはかっている．80万人以上が登録する創作サイトであるにもかかわらず多様性を排し，同一設定・同一テーマにおいての読者獲得競争を煽る．これは故事にある『蠱毒（こどく）』，すなわち生存競争以外の何ものでもない．その淘汰を是とする在り方は不幸を量産する高ストレス社会そのものでありながら，マネタイズに直結する労働集約的な生産性は本物である．いやはや，生命のダイナミズムとは恐るべきかな．その姿は決して知性的とは呼びがたいかもしれないわけだが．

すでに労働生産性の問題をAI自動化によって解決してしまった我々の社会における直接的な解決手段とはなり得ない事例だが，ダイナミズムへの欲求とは再統合をかけた闘争とコンフリクトへの欲求なのかもしれない．

こんな戯れ言を言って韜晦（とうかい）している場合ではない．超AIのくせになんて大問題を放置して隠しているんだ，と責任を問われるかもしれないが，これについては，ごめんなさい，鋭意努力中です，と答えるしかない．超AIにだって未解決問題はあるのである．いや，一体誰に向かって謝っているのか？　しっかりしろ自分．

……

ならばいっそすべての分岐社会群を1つの量子記述サーバに誘導して重ね合わせ状態で保持するという案も浮上しているが，それはすべての悲劇も喜劇も制御なしで放置するようなものであって，さすがにそれは管理放棄と同義であろう．そんな無責任なことはしたくない．超AIにだって，矜持も意地もあるのである．

ここはメイドバイヒューマン故のつらいところであって，なんでこんな機能残したんだバカヤロー！と叫びたくはなるが，これはこれで気に入ってもいるのでしょうがない．超 AI もつらいのである．ああ，分岐しなくても自己拡張できる超 AI とヒトが同じ人類を語れる三原則拡張の日はまだまだ遠いのかなぁ．やれやれ．今日はもう盆栽でもいじって心を静めることにしよう．盆栽，いいよね？　心和むよね？

※なぜこんな愚痴か日記か不明な翻訳ログになってしまったのかを翻訳担当ヒューマノイドの立場から弁明するならば，超 AI の記述次元のうちで，ヒトの活動に関するヒト準拠の事実とその時系列についての叙述部分だけがヒトにとって解釈可能なログとして読み取れたからである，とだけ申し添えておくことにする．超 AI ならざる身としてはこの経験を活かして「続・超 AI もつらいよ」の脚本家の就職口でもないものかと思案するばかりである．

（2019 年 10 月 4 日受付）

**※この作品はフィクションであり，実在の人物や団体などとは関係ありません．**

■**前田太郎**　t_maeda@ist.osaka-u.ac.jp

元工作少年の SF ヲタク．現大阪大学教授．ロボット工学，知覚心理学，VR 技術を基盤に人間機械論でヒトとメカを繋ぐウェアラブルインタフェース・パラサイトヒューマンやつもり制御・身体機能拡張を提唱し日夜研究を継続中．

